

佐々木 照央

我が大学のエスペラント授業・私の経験

Mia sperto de Esperanta kurso en la niaj universitatoj (2005-2008)

2005年4月から埼玉大学でエスペラントの授業を開始した。同僚の安達忠夫教授と共に2つの初級講座を開設したところ、私の授業には208名、安達さんの方には100名の受講生が来た。最初に用意された教室では収容しきれず、他の大教室に移してもらったが、椅子に座れない学生が大勢床にすわって聴講するという事態。この奇跡は石川智恵子さんにも見てもらった。教材を配布するだけでも15分かかる、この状況で出席をどう取るか。私は出席表を皆に配布し、扉に貼った袋に入れて帰らせることにした。ついでに表の裏面にその日の重要表現を指定して作文を書き記すように課した。つまり毎回小試験とした。不思議なことに学生はこの方法が気に入って喜んでその日の課題を裏面に書いた。今ではその出席表が膨大な歴史的史料として残っている。

授業科目名は担当表で決められているのでさすがに「エスペラント」とする訳にはいかず、私の方は「ロシア・東欧の歴史と文化」、安達さんの方は「ゲルマン文化」、などの講義題目のもと、副題に「ポーランドで生まれた世界語」などとした。学生の中には「だまされた」と思った者もいたが、エスペラントを学ぶ利益のほうが勝っていたので満足してくれ、当局に告げ口しなかった。横浜の岩谷さんが学生時代に中国語の時間にエスペラントが教えられた、と私におっしゃったが、その時は現代中国語改革、とくにピンインの作成にエスペランティストが関わったことにひっかけて講義されたとのこと。今の日本の状況では「ひさしを借りる」のも方便として許される、と思う。しかしこの方法は、個人的努力によって維持されうるもので、私たちが退職したらエスペラント授業は埼玉から消える。制度として正式の外国語科目にするのが今の状況でいいかどうか、また可能かどうか、これもわからない。全国の大学で英語以外の第二外国語が軽視され消滅しつつあるのが現状である。

安達さんと私がエスペラントを教える決意をしたのは、大学で英語必修、他の諸外国語（独、仏、中、露）は不必要とされる事態が2005年から発生したためである。第二外国語非常勤講師の大量解雇など、国立大学の独立行政法人化に伴い外国語合理化時代が始まった。仏、独、露語の教師達が退職したあとは補充しないこととなった。重視される英語もその例に漏れず、従来の文学的な要素は払拭され、「スキル教育」と称してTOEICでの得点向上を図るCALL（コンピュータ利用外国語教育）が導入された。大学生がいつせいにコンピュータでTOEIC式の回答訓練をしている姿は異様である。試験回答訓練としての英語という足枷から解放しない限り英語力の向上は不可能である。大学では第二外国語どころか、英語教育も壊滅したのである。堀泰雄さんの『日本からの報告』にもその現象が記されている。「実践」とか「スキル」という怪しげな用語の下に、語学憎悪の政治屋が乱暴狼藉を働いている。この事態を憂慮した私と安達さんが自分の講義の一部をエスペラント

教育に当てることを決心した。2004年秋に講義要綱を出す際、その旨を講義内容に明記した。エスペラントは私と安達さんにとって言葉の本源を教えてくれた。安達さんは英、独、仏、露、デンマーク、スウェーデン、イーディッシュ、ヘブライ、ギリシャ、ラテン、漢文その他に通曉し、『素読のすすめ』で有名である。高校時代エスペラントクラブを立ち上げ、教師から「危険な言語」として禁止された経験を持つ。安達さんはエスペラントの基礎の上にとくさんの言語を習得していった。私は多くの言語を漁り振り回された後2002年にエスペラントを始めた。安達さんは私にエスペラント聖書を下さった。私たちはとくさんの言語に取り組んできた経験からエスペラントが諸言語の扇の要であることを実感している。学生たちが語学好きになってくれることを祈りながらエスペラント授業を開始した。

最初、安達さんは同じ名字の著者によるエクスペレスの教科書を使用、私は阪直著『20のポイントで学ぶ国際語』を使った。大学の授業は前期、後期とも3ヶ月程度で終わる。僕の場合は2ヶ月で阪さんの教科書を終わり、その後アンデルセン童話『雛菊』をザメンホフ訳で読んだ。英、仏、独、和、の対訳も配布した。阪さんの教科書は生きのいい文章が最初から出てくる好著である。学生たちはほとんど落ちこぼれず、最終試験を受けたのは私の授業では194名であった。彼らの感想については、2005年の横浜での日本エスペラント大会で報告、資料配布した。期待通り、受講生の多くが語学への関心を強く持ってくれるようになった。エスペラントによって英語が新鮮になった、ドイツ語、フランス語をしっかりと勉強したい、などの感想が多かった。さすがにロシア語に言及したものはいなかったが。初期の目標は言語感覚を新鮮にすること、であったのでそれは十分に達成できた。

まさに、その同じ時期に埼玉大学教養学部ではヨーロッパ文化・アメリカというコースが作られ、従来の米、英、独、仏、スラブという個別のコースが廃止された。個別のコースの時代には各コースに2～3人くればいい方だった。週刊誌『アエラ』で私たちの、独、仏、スラブは受講生が少ないと名指しで全国的に批判され、「お気楽教師」と呼ばれた。反語学教師キャンペーンが日本の「進歩的」雑誌や新聞紙上で行われ、その効果もあってめでたくコース統廃合とあいなった。その統合コースも学生が少なければ廃絶の危険性があった。しかしながら、2005年前期の講義のおかげでエスペラント受講生がどっとヨーロッパ文化コースに入ってきてくれた。その結果、以前は全部で10人に満たなかったのが、統合後一学年40名以上という大所帯に変わった。

2006年から、エスペラントは全学向けではなく教養学部内講義となり、私は「欧米文化入門」という講義題目でエスペラントを教えた。聴講生は30人くらいであったが、質は高く、堀泰雄さん、遠井国夫さん、田中滋さんが講義見学に来て、褒めてくださり、遠井さんは自分のブログで報告し、直接法による授業と評価してくださった。またこの講義は学部内での講義方法研究に利用され同僚たちが見学に来て学部報にもその模様が掲載された。これはインターネット上にあるので、興味ある方は参照して欲しい。私の質疑応答方式は独特の語学教育法として同僚が高く評価してくれた。おそらくこの時にエスペラントが教養学部内で公的に承認を受けたと思われる。何しろ2ヶ月半で、学生たちがアンデルセン童

話をすらすら読めるだけでなく、エスペラント語による質疑応答にも難なく答えられる、学生も生き生きしている、ということに同僚たちは驚嘆した。

その年の秋期講義では二葉亭四迷の日本初の教科書『世界語』を使用してみた。二葉亭がロシア文学者であるから、「ロシア文化」という講義題目と矛盾しない。この教科書は『Fundamento de Esperanto』の翻訳といってよい。学生たちにはエスペラントは読めるが、二葉亭の日本語に苦勞していた。読めない漢字が多いのである。受講生の一人、中国人留学生はこの教科書で学び、エスペラントで卒論を書こうとしている。

2007年から、東大文学部でエスペラント語を教えるように沼野充義さんから依頼され、引き受けた。これを契機に自分で『速修世界語』と題する自家製教科書を作成した。私のロシア語教科書が『速修ロシア語』なので、その兄弟版的な名称にした。また、日本で捨てられ、中国で拾われた「世界語」という呼称を復活させたいと思った。日本では漢字で表現することへの反感の傾向が「世界語」という表記を放棄させ、「エスペラント」と呼び習わすようになった、と中国人言語学者銭玄同が証言している。私は逆にカタカナでの外来語表記が好きになれない。おおむねカタカナ外来語は内容を曖昧にして、乱暴な政策を行う隠れ蓑になっている。「リストラ」などがいい例だ。私が首相ならカタカナ外来語禁止政策を国会で決議させるのだが。

東大では火曜日朝一時間目ということで、聴講票では40名の名前があつたが、実際に出席してきたのは20名足らずであつた。本郷なので、3・4年生が対象であつた。『速修世界語』は6月上旬で終了、アンデルセン童話『王様の新しい衣服』（裸の王様）と『雛菊』を読んだ。石川智恵子さん、ドイヒロカズさん、田中滋さんが見学にみえた。人数があまり多くないのに失望されていたようだが、授業の進め方には驚いてくださった。エスペラントでの質疑応答に加えて、自分が知っている外国語で担当部分の訳を朗読する、というやり方は印象的だったようだ。テキストはエスペラント、英、独、仏、露、デンマーク語を併記しておいた。私はおっとりがたなでデンマーク語も学習したが、すぐに忘れてしまった。東大で正式な題目「エスペラント」を冠して講義されたのは、これが最初かも知れない、と沼野さんは言った。その意味では歴史的な事件といつていい。受講生の一人は世界大会にも出席し、もう一人は新渡戸シンポにも来た。

この年、埼玉大学では試しにロシア文学講義でプーシキンのエスペラント訳を使用してみた。既習者が多かつたからである。『ベールキン物語』と『エヴゲーニイ・オネーギン』のエスペラント版を配布、日本語訳、ロシア語原文と対照させた。出席者各人に担当作品の感想を報告させ、気に入った表現をエスペラントで付記させた。学生たちには大好評で、この授業の進め方が気に入って今年もロシア文学を受講するという学生がいる。私のエスペラント訳『エヴゲーニイ・オネーギン』の論考はこの講義の成果である。また大学院生向けの講義ではドストエフスキイの小作品をエスペラント訳で読んだ。一ヶ月足らずで『速修世界語』を読み、すぐに作品に移った。少人数の場合、短期間で文法を終えられる。またロシア語作文という授業科目では皆エスペラント語を既習であつたので、アンデルセン

の童話『野の白鳥』と『みにくいあひるの子』を露語、エスペラント、英、仏、独対照で読ませた。好きな言語で朗読し、和訳しなさい、と指示し、朗読後、ロシア語ならそれで質疑応答し、他の諸言語は他の諸言語で質疑応答して作文させた。私の質疑応答方式は外国語作文授業に応用できるのである。また和文の下に自分が勉強している外国語訳を書き記す作業をするようにと指示しておいた。

このように様々な言語のアンデルセンが手に入るのも安達忠夫教授のおかげである。彼がアンデルセンの伝記を書き、そのために沢山の資料を集めてくれたおかげで、各国語訳アンデルセンが容易に準備できる、というわけである。その安達さんですら、ザメンホフ訳は極めて質が高く深い考察が加えられていると、舌を巻いている。

またアンデルセン童話そのものが、文学のみならず、哲学、社会科学の貴重なテキストである。真実と偽、同情・同苦、言葉の重み、苦難を経由した精神の成長、その他学問研究にとって極めて大切な思想を与えてくれる。それを読めば一生涯役に立つ知的財産となる。エスペラント学習のみならず、すべての学問のたいせつな基礎を童話によって吸収できる。おそらく、ザメンホフがアンデルセンの翻訳に全身全霊を傾けたのもこの童話を通じてエスペラントを習得してほしい、諸学の基礎を身につけてほしいと願ったからであろう。有名な『裸の王様』も子供時代に読んだものとはまったく異なる深い意味を学生は読み取ることができる。マスコミ論などを専攻するものには必読文献であり、一般教養として最適な文献である。アンデルセン童話を深く読んだ者は、人生を深く味わう、また人生を深く体験したものは、その童話を深く理解する。優れた童話は人生の縮図、社会科学の簡潔な公式である。エスペラント訳はその公式習得の助けとなる。

アンデルセンだけではない、ロシアの文豪トルストイの童話も同様である。私の『速修世界語』にはトルストイ童話を二つ採用した。

Varja posedis fringelon. Ĝi vivis en la kaĝo kaj neniam kantis. Ŝi alvenis al ĝi.

“Tempas jam kanti, fringelo!”

“Liberigu min eksteren, en la libero mi tutan tagon kantos”.

ヴァーリャはまひわを飼っていた。まひわは籠の中に住んでいて一度も歌わなかった。ヴァーリャはまひわに近寄った。「もう歌ってもいいころだよ、まひわちゃん！」

「私を外に出しておくれ、自由になれば一日中歌います。」

Gruŝa ne havis ĉe si pupon. Ŝi prenis pajlon, faris por si el pajlo pupon, kaj ĝi estis ŝia pupeto. Ŝi nomigis ĝin Manjo. Ŝi portas tiun Manjon sur siaj brakoj.

“Dormu, Manjo! Dormu, mia filineto! Baj, baj, baj!”

グルーシャは自分の人形を持っていなかった。彼女は干草をとって、干草で自分の人形を作った、そしてそれが彼女の愛しい人形だった。彼女は人形をマリアちゃんと名づけた。彼女はマリアちゃんを腕に抱いた。

「マリアちゃん、ねんね、あたいの子、ねんね！ ねんころり！」

私の『速修世界語』にこのトルストイの小作品を採用したのは、この二つがまさに哲学、社会科学の基礎公式になる、と考えたからである。『ヴァーリャとまひわ』にはトルストイの宗教的無政府主義思想、自由教育思想、ルソーの「自然に還れ」思想などがこめられ、「自由」と「壁」の深刻な問題が明確に提示されている。籠の中であれば「保護」されている、しかし「自由」は制限される。外に出れば「自由」になるかもしれないが、「保護」を失う。学生達は何故受験勉強に駆り立てられてきたか？立派な籠の中に入るためであった。また「自由」といっても、ここには二つの「自由」が描かれている。第一は、自分のしたいことをする、という感性的自由、つまり快・不快原理に従った行動の自由である。第二は、ヴァーリャに対しては「克己」が求められている。つまり自分自身の欲望から自由になる、理性的自由である。排泄したい、と感じても便所に行くまで我慢する精神である。ヴァーリャに対しては、小鳥を独占支配したい、という欲望に打ち克って小鳥を解放してやりなさい、という呼びかけである。小鳥の言葉はヴァーリャの心の中で生まれたささやきでもある。トルストイは『復活』の中でその克己の自由が欠けると支柱のない草のように地面をはいずるだけになる、という。また、音楽家が自由自在に楽器を演奏したり、スポーツ選手が自由に優れた技を出したりするのは克己による訓練の賜物である。自分自身の肉体を自由に制御するためには、厳しい日々の訓練に耐えなければならない。この喩は小鳥には行動の自由を与え、ヴァーリャには自分の所有欲から自由になって欲しい、と訴えている。この自由の呼びかけの対象を間違えると、圧制となる。小鳥に克己をヴァーリャに欲望の自由を、としたらどうなるか？また経済学は第一の自由に基づき構築され、倫理学は第二の自由に依っている。

二つ目の喩、『グルーシャの人形』は精神現象学である。人形の欠乏を意識した時、身近にある物で人形を作る。その人形に名前をつける。そしてそれを娘と呼んで寝かしつける。「娘」と呼ぶとき、幼い少女グルーシャは意識の上で「母」となる。これはグルーシャの「もう一つの我」alter egoである。もし「娘マリア」が「まだ眠くない、お話して」などと答えたら、それはグルーシャの「もう一つの我」同士の「対話」となる。また人間は己の創造物を媒介にして成長変化する。画家だから絵を描くというよりも、絵を描くから画家となる。人間は自分の創った物によって支配される。悪いものを創ればそれに、良いものを創ればそれに大きく影響される。また、拙い人形は回を重ねる毎に改良され、完成度が高くなっていくであろう。しかし自分の創作物に執着すればそれは物神崇拜になる。この物語の出発点は「貧しさ」、「欠乏」、「孤独」である。それを、つまり「非在」や「無」を意識し、それを補う創造行為、そして「想像」が精神発達を促進する。このグルーシャの喩は哲学の根本を把握するのに役立つことであろう。

「まひわ」や「人形」の喩を脳の襞に刻んだ者は、これから広大な学問の世界に踏み出す上で、貴重な案内図、簡潔な公式を手に入れた、といえよう。学生は尋ねる、「トルスト

イはこんな事を考慮して童話を書いたのですか？」と。アンデルセンでもトルストイでも、優れた作家ならば自然に崇高な精神を作品の中に描き出すことができる。人類の財産に成っている作家、芸術家の作品は見る者の意識の程度によって、いくらでも深く鑑賞することが可能となる。

エスペラントの初級教科書の中に文豪の傑作を含めたことで、学生たちは語学の勉強の醍醐味を味わってくれているという手ごたえを私は感じている。つまらない文章ではなく、生き生きとした味わい深い文章を初級のときから読んでおけば、それは一生の財産となる。

それ以外に、私はザメンホフの諺集から例文をたくさん取ってきた。暗記して一生役に立つ文を提供したかったからである。ザメンホフが心血を注いだ文章、それは諺集、旧約聖書、アンデルセン、であった。それらはエスペラント学習の最適のテキストである。語学学習において聖書の比較対照はきわめて良い方法である。日本文を見ながら諸外国語でそれを唱えていけば自動的に同時通訳の訓練になる。しかし宗教的理由から聖書を敬遠する人もあるだろう。そんな立場の人々にも諺、アンデルセン童話は貴重である。

私は切に願う。日本の子供たちがエスペラントを学び、アンデルセン童話や日本文学を日本語対照で読んでくれる日がくるようにと。エスペラントは外国語どころか、日本語を理解し習得し深く読む上での支えになる。まさに「エスペラントは言葉のそろばん」なのである。

最後に私の質疑応答授業法の一端を先のトルストイ童話を例に紹介しておく。一つの文章から、どれだけの疑問文が可能か、それはチョムスキイが生成文法で用いた方法に似ている。

Varja posedis fringelon. Ĝi vivis en la kaĝo kaj neniam kantis. Ŝi alvenis al ĝi.

“Tempas jam kanti, fringelo!”

“Liberigu min eksteren, en la libero mi tutan tagon kantos”.

- 1) Kiu posedis fringelon? – Varja posedis fringelon. (語順自由) Fringelon posedis Varja. Posedis fringelon Varja. Ĝi estas Varja, kiu posedis fringelon.
- 2) Kion Varja posedis? – Varja posedis fringelon.
- 3) Ĉu Varja posedis fringelon? – Jes, ŝi posedis fringelon. Jes, ŝi posedis ĝin.
- 4) Kiu vivis en la kaĝo? – Fringelo vivis en la kaĝo. Tie vivis Fringelo.
- 5) Kie vivis fringelo? – Fringelo vivis en la kaĝo.
- 6) Ĉu la fringelo kantis en la kaĝo? – Ne, ĝi neniam kantis en la kaĝo.
- 7) Kiu alvenis al la fringelo? – Varja alvenis al la fringelo.
- 8) Al kiu alvenas Varja? – Al la fringelo alvenis Varja.
- 9) Kien Varja alvenas? – Varja alvenis al la fringelo.
- 10) Kion diris Varja al la fringelo? – Ŝi diris: “Tempas jam kanti!”. Ŝi diris, ke tempas por fringelo jam kanti.

11) Kiel la fringelo respondis al Varja? – Ĝi respondis: “Liberigu min eksteren, en la libero mi tutantagon kantos”.

12) Kiam la fringelo kantos? – Ĝi kantos en la libero, se oni liberigus eksteren.

Gruŝa ne havis ĉe si pupon. Ŝi prenis pajlon, faris por si el pajlo pupon, kaj ĝi estis ŝia pupeto. Ŝi nomigis ĝin Manjo. Ŝi portas tiun Manjon sur siaj brakoj.

“Dormu, Manjo! Dormu, mia filineto! Baj, baj, baj!”

1) Kiu ne havis ĉe si pupon? – Gruŝa ne havis ĉe si pupon.

2) Kion Gruŝa ne havis? – Ŝi ne havis pupon.

3) Ĉu Gruŝa havis ĉe si pupon? – Ne, ŝi ne havis pupon.

4) Kion ŝi prenis? – Ŝi prenis pajlon.

5) El kio ŝi faris por si pupon? – El pajlo ŝi faris por si pupon.

6) Kion ŝi faris el pajlo? – Ŝi faris el pajlo pupon.

7) Kies pupeto ĝi estas? – Ĝi estas pupeto de Gruŝa.

8) Kiel ŝi nomigis ĝin? – Ŝi nomigis ĝin Manjo.

9) Kion ŝi nomigis Manjo? – Ŝi nomigis pupon Manjo.

10) Kiu nomigis pupon Manjo – Gruŝa nomigis pupon Manjo.

11) Kiel ŝi portas Manjon? – Ŝi portas Manjon sur siaj brakoj.

12) Kiu portas Manjon sur siaj brakoj? – Gruŝa portas Manjon sur siaj brakoj.

13) Kion diras Gruŝa al Manjo? – Ŝi diras: “Dormu, Manjo! Dormu, filineto! Baj, baj, baj!”

答え方は多様である。上記の答えは単なる一例に過ぎない。直接語法を間接語法に変えてもいい。このような質問応答方式を教師と学生、学生と学生、の間に順番に行っていく。学生は受身一方ではなくなり、授業に対して積極的になり、教室が活性化する。学生自身、教師とは違う質問を作成しようとする好奇心が湧いて来る。

質問をする際には呼び掛けの前置きの言葉を使うように心がけさせる。また学生が次の学生に名前を聞いてから自分で質問を作ったずねる。

- Bonvole diru al mi kio estas via nomo?

- Mia nomo estas Hori Ŝigeru.

- Bonvolu diri al mi, s-ro Ŝigeru, kion faris Gruŝa por si el pajlo?

- Ŝi faris el pajlo por si pupon.

名前の聞き方は、前の人と違う文で尋ねる。Kiel vi nomiĝas? Kiel oni nomas vin? など。このような質疑応答方式をとると、会話の訓練になるだけでなく、文章を深く理解

する一助となる。エスペラントやロシア語は語順が自由なので、質疑応答し易い。しかし、英語の場合、質問文が作成できるまでにある程度の学習時間がかかる。ただし、英語でこの質疑応答方式を導入すれば、読み、書き、聴き、話す、という全面的な英語教育が可能となる。それには英語教師自身の能力向上が求められるが。私自身は自分のロシア語教科書『速修ロシア語』で20年前からこの質疑応答方式を用いて教育してきた。成果は大であった。エスペラント教育に応用してさらにこの方法の効果を実感している。

教科書は短く簡潔であればあるほど良い。しかし、質疑応答が可能な文章、読んで有益な文章がなければよい教科書とはいえない。語学は単に文法の学習ではなく、神聖な言葉に心身を遭遇させる道である。教育の目的は「聴く耳をもつ」人間を育成することにある。

「聴く耳」を育むには常に良い思想、良い言葉に触れて審美耳を養っておかねばならない。ザメンホフはアンデルセン、旧約聖書を我々に贈ってくれた。語学能力を伸ばすのは作品自体の力である。アンデルセン、プーシキン、ドストエフスキイ、トルストイ、チャーホフ、ゲーテ、ダンテ、等々エスペラントで人類の傑作を今やインターネットで読むことが可能である。受験で破壊された語学感覚はエスペラントで回復できる。多くの大学生がエスペラントのおかげで語学への新鮮な感性を取り戻し、充実した学生生活を送るようになった。「エスペラントをとった学生はいきがいい」、といわれる。このことが私の大学教育における最良の成果である。